

# 佐藤春夫「わんぱく時代」－「大逆」の後に書き始める－

SATO haruo's "*Wanpaku Jidai*" :  
Start Writing After The High Treason Incident

磯村 美保子

Mihoko ISOMURA

## はじめに

佐藤春夫の年譜を見るとその早熟な文学活動の始まりに必ず、「大逆」事件への言及がある。明治43年（1910）の5月から6月にかけて、天皇暗殺及び危害を加える計画の共同謀議を行なった「大逆」の罪で幸徳秋水、菅野須賀子<sup>1)</sup>ら26名の「社会主義者」が検挙された。翌年1月の死刑判決を受け、そのうち12名に死刑が執行された。検挙されたのは幸徳らの関東組を初めとして、新宮、関西、熊本にまで及び、全国の社会主義者のうち取調べを受けたものは数百名に上った<sup>2)</sup>。

佐藤春夫は新宮出身である。同郷であり、父の友人でもあった大石誠之助の死刑執行を聞き「愚者の死」（1911）という詩を『スバル』に発表した。19歳の時のことであった。「偽より出でし真実なり」という大石の獄中手記からとったことばが詩に詠われている。

あの事件の結末にあたって書いた僕の小さな詩が、すべて反語的な表現であつたから官憲の眼はくらしましたが、その底に潜み流れていた僕の感情は、官憲の不正に対して心ひそかに憤りを感じていた一部の人々の心にふれ、共鳴されるものが多かつたと見えて、僕の小

さな詩は人々の記憶に残つて、僕という少年詩人の存在を注目させる役に立つた。この利益はいはば火事場の燃え残りがたばこの火をつけるに役立つような話であるが。

「わんぱく時代」1957年  
『定本佐藤春夫全集』第15巻所収

日露戦争終結後、日本は朝鮮支配の布石を次々と実行、明治43年（1910）に朝鮮（大韓・当時）を植民地化した。日露戦争がロシア革命による自滅がもたらした勝利であることが、日本政府の社会主義者への強行な弾圧の引き金となった。「一人の無政府主義無き世界に誇るに至るまであくまでもその撲滅を図る」という検事局の、そして山県有朋、桂太郎らの時の政府の意向が強力に働いていたのである<sup>3)</sup>。「大逆」事件の犠牲者の中には菅野のような確信犯から大石のような思想的には周辺の人物が含まれる。当時全国で社会主義的な活動をしていたものたちをスケープゴートとして一斉に検挙したのである。

学校騒ぎ以来わたくしは多少なじみになつた社会主義思想に関心を持ち始めて、これに共鳴する点もないではなかつたが、人

生は唯物的に割切るには少し複雑な者だと考え、それに、大逆事件におびやかされて、義を見てなす勇もなく、社会主義青年にならないで以前文学青年であつた。

「私の履歴書」(1956)  
『定本佐藤春夫全集』第14巻

佐藤春夫の文学的な出発点には「大逆」事件があつた。「大逆」事件は文学者としての彼の限界を最初に定めたのではなかったのだろうか。後に関東大震災における大杉栄らの虐殺事件にも彼は遭遇する。いずれも近い知人を権力によって虐殺され、それでいて難を免れた「傍観者」として関わることとなる。彼は権力によって殺される対象とはなりえなかった。まだ文学者と行為者の間が近い関係であつた明治の終わりと大正の終わりに佐藤春夫が遭遇したこの二つの事件は、どのように彼に影響を与えたのだろうか。また、佐藤春夫の「大逆」事件の認識はいかなるものであつたか。本稿では明治43年（1910年）の「大逆」事件と佐藤春夫の関係に焦点を当て考察する。

## 1. 「大逆」事件

### 1-1 「大逆」事件と紀州組

「大逆」事件の首謀者とされた幸徳秋水は死刑の3日前、明治44年（1911）1月21日に以下のような遺言を残している。

幸徳は昨紙に記載せる磯部四郎氏への書状の如く自分は既に覚悟し居れど自分より若き人や妻子のある人に対して気の毒なり併しそれを今更悔ひても詮なし只々乗合はした船が難破したものと思つて諦めて貰ひたし

『都新聞』 明治44年1月25日

幸徳はこの事件は難破事故のようなものであると述べ、巻き添えにしてしまった者たちへの謝罪を述べている。新聞の論調自体も「幸徳伝次郎菅野須賀子大石誠之助奥宮健之等十二名の逆徒に対しては更に不日畏き辺りの恩命下りてその大半に第二の特赦令状下るべしとまで噂され居たるが早くても昨朝に至り死刑を執行されたり」（『都新聞』明治44年1月25日）と予想外の厳刑であつたことを示している。

「大逆」事件は「刑法第七十三条」つまり「天皇、皇太后、皇后、皇太子又ハ皇太子ノ孫ニ対シ危害ヲ加ヘ又加エントシタルモノハ死刑ニ処ス」という法令を根拠として、社会主義者の大量検挙を行なつたものである。この法には無罪か死刑しかなかった。実行はしなくても「予備陰謀」を企てただけで罪に問われた。まず、明治43年（1910）5月に「大逆」事件の本体とされる明科事件<sup>4)</sup>と呼ばれる爆弾製造事件が発覚し、菅野（東京監獄に収容されたまま起訴される）、宮下太吉、新村忠雄（弟）、新村善兵衛（兄）、古河力作、新田融、幸徳らが次々と逮捕された。この事件が幸徳、新村らと接触のあつた大石誠之助に及んだのはその二日後の6月3日のことである。それ以降紀州組といわれる高木顕明（浄泉寺住職）、成石平四郎、勘三郎、峯尾節堂、崎久保誓一ら6名が捕らえられた<sup>5)</sup>。

この事件の弁護人の一人が、新詩社同人の平出修であつた。佐藤は平出と「大逆」事件に関して以下のように作中で語っている。

前年の5月以来問題になつて、真相の知れないままの大逆事件の裁判に異常な関心を抱いた啄木は、同門の平出修が弁護人になつたのを幸、平出から事件の真相やら、裁判の経過や予想などをかぎだしに行つたものである。貧苦に苦しんだ啄木にはこの

事件で社会主義者が理由無く迫害されてゐると思えて義憤を感じてゐたから、わが師が門人の平出を励ましてその弁護人としたのも、また、平出が心血を注いで被告らのために尽くしてゐるのも喜びであつた。

『昌子曼荼羅』昭和29年（1954年）

作中では、平出は「師匠（与謝野寛<sup>6)</sup>）が事件に深い関心を寄せている」にも関わらず、無沙汰をしているので啄木に事件の経過を先生の耳に入れておくように頼んでいる。

啄木は先生に会つて、先ず平出が弁護のため熱情を傾けてゐる様子や、それにもかかはらず、裁判は希望が持てない。というのは事件は実のところ当局がわずか三四人の談合と他の偶然の出来事をつなぎつけ組み合わせて虚虚実実の間に被告二十数人といふ異常な大事件をでつち上げて被告等を罰するのを目的としてゐるかの形跡があるものだけに、公明正大の弁論も無益に葬られさうなといふ平出の話の適要を啄木は声をひそめて語ると…・（略） 『昌子曼荼羅』

「わずか三四人の談合」とは菅野・新村・宮下・古河らのことを指す。このうちの新村忠雄は大石誠之助のところに薬局生として明治42年に寄宿している。

当時、「大逆」事件に関して目立った反応を示したのは『スバル』周辺の者たちだった。「すくなくとも「大逆」事件直後において、密室にもひとしいかたちで行なわれた裁判の情報は『スバル』発行人であり、大石誠之助を中心とする「新宮グループ」のうちの二人（崎久保誓一、高木顕明）の弁護を担当した、平出修に頼るほかなかった」<sup>7)</sup>と指摘されている。

一方で事件の中心人物として幸徳と菅野の関係がスキャンダラスに取り上げられ、菅野の存在はメディアによって『無政府主義』の女がジェンダー構造の逸脱と乱交するセクシュアリティによって表象され<sup>8)</sup>ることとなる。これは後の関東大震災の際の大杉栄虐殺事件の際の伊藤野枝に関わる表象と重なる。『婦女新聞』<sup>9)</sup>（明治43年11月18日）は、この事件を取り上げ、「何にしても此の被告事件は極々少数の凶漢に関する事で、且あまりに意外で、あまりに突飛であるだけに、此の為、国民の思想を僅かでも混乱させるやうな心配は無いから、それほど恐るゝには足らぬと思ふ」と述べている。そして、「大逆」事件より「一層恐るべし」ことは「我が家庭道德の基礎が動揺の状態にある事を以て一層恐るべく、一層寒心すべき、国家の大事であると確信する」としている。つまり、「大逆」事件は一部の「凶漢」の事件であるからあまり世情に影響はない、むしろ国民に影響を与えているのは家庭道德の乱れであると述べているのである。「大逆」事件の恐らくは数少ない確信犯であつたであろう菅野須賀子に関しては「今回空前の大陰謀に関与して、大悪無道の妖婦と謳われるに至つたが彼女果たしてそれほどの恐るべき女であらうか」と述べ、ただ「虚栄心」と「蛮勇」と「貞操に関する無頓着」さを持ち合わせた平凡な女にすぎないと貶める。「幸徳の妻であるといふ以外別に党内に重きをおかれるほどの実力はなかつた」

若し彼女が、幸徳に振り捨てられて、新たな男子に拾い上げられたならば、その男子の主義は即ち直ちに彼女の主義と化するであらう。

憐れむべき菅野須賀子よ。汝は実によい教訓を示してくれた。世の父母たちは汝によつて生学問した青年女子の放浪生活がい

かに恐るべき運命の種を蒔くかを学んで、警戒するにいたるだらう。

『婦女新聞』（明治43年11月18日）

ここでは菅野はただの「虚栄心」の強い「生学問をした」つまらない女にすぎないとして表象されている。内藤珠千子が指摘するように<sup>10)</sup>メディアにおける女性表象の定型をみることができる。また、内藤は、「大逆」事件に隣接した出来事として、朝鮮王妃の閔姫暗殺（明治28年）に起因する伊藤博文暗殺（明治42年）そして、明治天皇の病死（明治45）を配置して分析している。

「大逆」事件に関しては国家による冤罪事件であることを明らかにした多くの先行研究が既に存在する。ここではさらに佐藤春夫と関わりのあった大石誠之助を中心とした紀州グループについて触れておきたい。

## 1-2 紀州組<sup>11)</sup>

「大逆」事件において紀州組といわれるのは、前述のように大石誠之助（医師）当時44歳、高木顕明（浄泉寺住職）45歳、成石平四郎（川船頭）29歳、勘三郎31歳、峯尾節堂（臨濟宗泉昌寺住職）26歳、崎久保誓一（牟婁郡蜜柑農家の息子）26歳ら6名である。この内、死刑になったのは大石と成石平四郎の両名、その他は無期懲役となった。無期となった4名のうち戦後まで生き延びたのは崎久保だけであった。

そもそも紀州組が検挙された口実は以下のとおりである。明科事件（爆弾製造実験事件）に関与した新村忠雄との関係を疑われた大石とその周辺へ捜査の手が伸びた。当初、事件は、宮下、新村兄弟、菅野、新田、幸徳、古河の7名にかぎるものと考えられていた。「今回の陰謀は実に恐る可き者なれども、関係者は只前7名のみに限られたるものにて、

他に一切連累者なき事件なるは予の確信する処なり」（東京朝日新聞 1910年6月4日、東京地方裁判所小林検事正談<sup>12)</sup> 幸徳にしる「この事件に関係ない筈がない」という予断の下、逮捕に至っている。

しかしながら、この期に一気に社会主義運動を撲滅しようという政府の強い指示<sup>13)</sup>のもと、この事件は一挙に拡大された。当時の捜査主任の小山松吉は、内山愚童を執拗に取り調べ、ついに以下の証言を聞きだし、大石らと事件を結びつける。

「この時分はもう内山以外に調べる者はないので、私は毎日内山と顔を見合わせて内山の旅行した先などを聞いてゐた。さうすると十月の十三日に内山が言ひますのに『四十一年の八月十二日に幸徳が私の寺に来ました。来た時分に熊野川の瀨八丁です、さう云ふ写真を見せました』と云ふ。『どう云ふ写真』かと私が聞くと、内山は『幸徳は同年の七月に新宮に行つた時に大石と二人で、瀨八丁に船を浮かべて遊んだやうである』と云ふ…兎に角、幸徳が自分のお寺に来て、大石と瀨八丁に月夜船を浮かべて爆弾を製造する話をしたと云ふのです」<sup>14)</sup>

この幸徳新宮来訪時の「川遊び」は、家族同伴のピクニックとでもいうべきものであったが、「月夜の共同謀議」とされ、明科グループと幸徳そして大石を結びつけることとなる。さらに紀州組への波及は、明治42年（1909）、正月の席での大石の東京平民社訪問についての土産話が原因であった。

「僕はこんど東京で幸徳に遭つたら、幸徳はこんなことをいつていた。政府がわれらに対する迫害はほとんどむちやくちやで、

演説もできなければ集会もできない。むろん新聞もなんにも言論の自由はないから、絶対的に暴圧されると温和になにもできたものじゃない、なにか一つ奇抜なことをやって政府を驚かしてやりたいものだ。なんでも決死の士、三四十名もあれば、富豪の倉庫をひらき、貧民に財を施し、諸官庁を焼き払い、宮城に進んで陛下に無政府主義を組織する許可を乞ふ云々ぐらいはやれる」

絲屋壽雄

『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』P105

この正月の席での土産話が「革命決死隊」の募集として言い換えられ、空前のフレームアップが完成する。この席に参加しなかったことで新宮教会牧師沖野岩三郎は連座を免れている。

裁判にあたって、大石の弁護を担当したのは、今村力三郎、鶴沢総明、新宮組の高木、崎久保の弁護を担当したのが前出の新詩社平出修であった。高木、崎久保の弁護を与謝野寛を通じて依頼したのが沖野岩三郎<sup>15)</sup>であった。

和歌山県ノ沖野某（岩三郎ナラン）ハ大石ト共ニ最初ヨリ大逆事件ニ関係シ居タル者ナルニモ拘ラズ巧ミニ事実ヲ晦マン処刑ヲ遁レ居ルハ甚ダ不都合ナリトノ風説盛ニシテ此隣ノ排斥ヲ受ケ立場ヲ失ヒ居レリ

『社会主義者沿革』<sup>16)</sup>

これは警察当局の資料であるが、明治44年3月下旬から五月にかけて、赤旗事件で入獄していた堺利彦が出獄後、事件犠牲者の遺族を慰問して回った後の帰京の報告の中であったとされる。沖野が「大逆」事件をどのように回避したのかは不明な点が多いが、そのために白眼視されたというのも皮肉である。沖野と佐藤は世代も関わり方も異なるが、「大

逆」事件を回避して生き残ったという共通点がある。佐藤は沖野が「大逆」事件関係者をモデルとして作品を発表することに対して批判的であった。

昨日、沖野岩三郎氏が来ました。同氏も9月には書物を出すさうです。私にも序文を書けといふやうなことでした。自転車<sup>17)</sup>は作品としても悪作です。しかし作者がモデルとして実在の人を描く場合に描かれた人はどんなに書かれても不快なものに相違ありません。けれども、モデルは必ずしも作中の人物と同じものではありません。寧ろ作者その人です。私は沖野氏が実在の人物を書くということに異存はありませんが、沖野氏が沖野氏のあまり円熟したとは評しがたい人生観の見界から人間を描き出して居ることを面白くないと思ひます。

大正7年(1918)8月2日 佐藤豊太郎  
宛書簡『定本佐藤春夫全集』第36巻P22

この書簡中に悪作として評されている「自転車」は佐藤一家をモデルとして書かれている。そのことに対して強い不快感を表わしているのである。

### 1-3 大石誠之助—「偽より出し真実なり」

大石誠之助は1867年(慶応3年)11月、新宮に生まれた。大石家は代々医者や学者を輩出した家柄であった。誠之助の父は増平といい、母かよとの間に三男三女があった。大石は三男として生まれ、特に長男の余平には大きな影響を受けたという。余平は進取の気質のある人であり、豪家の出身の西村ふゆと結婚した後、1883年に受洗している。その後は教会活動に熱心に取り組むが、1891年濃尾地震に遭い、夫婦共に死亡している。余平の子が西村伊作である<sup>18)</sup>。

この余平が大石に英学と医学の勉学をさせ、のちにアメリカ留学の渡航費用も出している人物である。誠之助は1885年京都同志社で英語を学び、同年大阪西教会で受洗している。この関西時代の大石は性行不良であったが、アメリカではコックや教会の手伝いなどをして苦学して医術の学位を得る。大石は1890年～95年までアメリカやカナダに滞在し、1896年には新宮で開業している。当時同業者として、佐藤春夫の父豊太郎が開業していた。佐藤春夫は1892年に同地に生を受けている。大石はもともと川柳（雑俳）や情歌を楽しみ、新聞や雑誌に投稿していた。この点でも、文芸的なたしなみをもった佐藤豊太郎とは近い存在であった。途中、伝染病研究のためシンガポールに渡り、インドに留学（1899～1901）、帰国後、伊熊えいと結婚する。このインド留学あたりから、大石は社会主義に関心を寄せ、様々な文献を読むようになった。

英領印度に止まること二年、恰も南阿の役に際し、帝国主義を唱ふる英国政治家の内情を窺ひ知り、併せて現時の文明が未だ皮相若くは虚偽たるを知り、帰朝以来社会問題の研究に心を寄せ、昨年来社会主義者を以って自任し且つ之が鼓吹に勉め居候。

1904年（明治37年）2月5日

「社会主義者」宛書簡

『大石誠之助全集2』 P269

大石は社会主義に関心を寄せ、医業の傍ら研究を続ける。また、貧窮に陥っていた同志たちの資金的援助者となる。その一方で、1904年には、米国滞在中にコックとして働き身につけた「洋食」を新宮にも広めようと、西村伊作たちと「太平洋食堂」を始める。大石は、新宮の青年たちに食事と娯楽の場を提供したいと考えたのである。のちにこの場所

が「新聞雑誌縦覧所」として開放され、学生時代の佐藤春夫が良く立ち寄るところとなる。太平洋食堂は大石の自宅の向かい側に作られたが、大石が客に洋食のマナーをいちいち教育したので、客足が遠のき、二年も立たずに閉店した。大石は相当な美食家でもあり、料理に関しての蘊蓄を堺利彦の『家庭雑誌』に度々書いている。そこでは「シチウ」や「スープ」の話や「ピクル」の製造法などの洋食の紹介や新案料理も紹介されている<sup>19)</sup>。

大石の社会主義への関わりは、雑誌や新聞を通じた言論家としての側面と資金援助者としての側面、さらに翻訳者としての側面を合わせ持つ。言論家としては、地元の『牟婁新報』『熊野新報』を始めとして前出の『家庭雑誌』、日刊『平民新聞』（1907年1月刊行）が発行されてからは『平民新聞』にも多く寄稿している。また、逮捕される1910年には沖野岩三郎と『サンセット』という雑誌も創刊している。資金援助者としては、例えば、1906年（明治39年）には、社会主義新聞『光』に計十三円、日本社会党に計五十円、『平民新聞』発行に二百円の寄付や出資をしている<sup>20)</sup>。また、東京などで食い詰めた社会運動家を食客として迎え、世話をしている<sup>21)</sup>が、このうちの新村忠雄を薬局生として置いたことが、「大逆事件」において大石の命取りとなる。

翻訳を手がけるようになったきっかけは、1908年上京し、平民社で幸徳秋水に会ったことからだと言われているが、それ以前にも「巴里コムミュンの宣言（下）」（『牟婁新報』1906）、「代議は詐欺也」（同紙1908）、「社会主義の道徳的根拠」（『熊本評論』1908）などを手がけている。いずれも原文に忠実なものではなく、意識であったという指摘もある<sup>22)</sup>。この幸徳との会談前後にクロボトキンの『パンの略取』を手に入れ、翻訳に取り掛かり、

翌年の一月には「新時代の経済学」として牟婁新報に掲載している。

この『パンの略取』は大石の逮捕当時(1910年6月)、佐藤豊太郎の下に借り受けられていて、春夫の手にあり、豊太郎が慌てて金庫の中にしまったとされる本である。

「ここに『パンの略取』とかいふ本があつたのをお前しらなかつたか」

「クロボトキンの本ですか。仮りとじの白い表紙に赤く大きな活字で表題のある」

「うん、それだ」

「あれなら、読みたいと思って僕がちよつと持つて行つてゐます」

「あれは大石から借りた本ぢやが、そこらにはふり出して置いてはいかん。早くここに持つてきなさい」

「わんぱく時代」

『定本佐藤春夫全集』第15巻 P267

佐藤の父豊太郎は、「大逆の謀議」があつたとされる幸徳新宮訪問の歓迎会の際、多忙のため参加していなかった。佐藤の周辺を掠めるようにして「大逆」事件が始まっていたのである。

さらに、大石の年表<sup>23)</sup>を見ると佐藤に関わる中学校のストライキ事件と「大逆」事件が絡まり合うようにして起こったことがわかる。中学生だった佐藤春夫は1909年8月の与謝野寛、生田長江、石井柏亭らの新宮での講演の際、時間稼ぎのための前座を頼まれ、急遽、自然主義的な内容の講演を行ったことによって学校から無期停学の処分を受けていた。

1909年4月～8月20日 新村忠雄大石家滞在。

8月21日 与謝野寛、生田長江らの講演、中学生佐藤春夫も

短い講演「偽らざる告白」を行なう。春夫はこの後、帰途につくと与謝野・生田らを送って京都に同行。その間に講演の内容が咎められ無期停学になる。

11月4日 新宮中学校でストライキが起こる。春夫はこのストライキの首謀者と見なされるが難を逃れ、生田を頼って上京。

11月5日 末広亭で新中問題有志大会があり、大石は「去れ、中学校校長」と演説。

12月11日 新宮中学理科教室で出火。たまたま上京中であった春夫は放火を指揮した者として疑われるが、ここでも難を逃れる。事情聴取のため新宮に呼び戻される。結局、原因不明。

1910年4月 3月に中学を卒業し、再び上京。生田に師事し、同年11月には与謝野寛の新詩社にも参加する。新詩社には「大逆」事件の弁護人平出修がいた。

5月 「大逆」事件関係者検挙始まる。

6月1日 幸徳逮捕。

3日 大石、西村、沖野宅家宅捜査、取調べ開始。

5日 大石予審請求、翌6日東京監獄へ送られる。

大石は春夫の父豊太郎の友人であったが、新宮中学のストライキの際、『熊野新報』に佐藤を援護する文章を寄せている。

寺内校長は、父兄懇談会の席で甚だ激烈な武断的な演説をやつた。斉藤教頭はこれを聞兼ねて、近頃校長は寝食を忘れて働くので、自ら健康を毀き、今のような激しい話をされたのだと弁疏的の演説をなされた。寺内君は今度のストライキが一学生の学術演説に原因したのだと言つた。教育者の4年も5年もかゝつて造り上げた生徒のあたまが、これしきのことで俄かに変わつて行くものとすれば、今の教育と言ふものは誠に頼み難いものと言はねばならぬ。

「新中間題雑感」『熊野新報』

明治42年11月11日

『大石誠之助全集1』 P301

結局、校長によって佐藤が首謀者であるかのように言われたこのストライキも、校長や職員の協同学資に関する使途を疑って生徒が詰問書を出したことに起因するものであった。校長は問題をすり替え、責任を佐藤に転嫁したのである。この新宮中学のストライキとそれに引き続き起こった出火事件には大石の周囲のものが扇動または関わったのではないかと晩年の佐藤は考えていたようである<sup>24)</sup>。

大石は実行型の社会主義者ではなく、また、理論の面でも幸徳に及ばなかったが、職業柄心情的に貧しい者、弱い者に同情を抱いていた。その表現手段として社会主義という回路を利用したにすぎない。「実際、主義の実行ということは私にとって一つの恐怖でありまして、他のものがそんな話をし出すときは、なるべくこれを避けてきかないやうにしました」と大石は今村弁護士にあてて「社会主義と無政府主義に対する私の態度について」という陳弁書を送っている。

もつとも多くの主義者の方から見たら、或いは私をば家庭をも業務をも、親戚の関

係をも抛つて主義につくするものと思つたかもしれません。それは畢竟私が口や筆によつて理想を絶叫することが強かつたのと、また、彼らがたまたま実行談に及んだ時、私はよくこれを避けるのみで、明白に反対しなかつた故です。この点において私は彼等をして私というものを買い被らせていました。誤解させていました－よし、私の方から好んで誤解させたのではなくとも、彼等の誤解するところに任せて居りました。つまり、私は同志に向つて偽善者であり、今の国家や制度に対しては偽悪者であつたのです。

明治43年11月13日

『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』

P147～149

これを獄中転向と考えるべきだろうか。彼は刑死の前に「偽から出し真実なり」という言葉を残している。「迫害とか実行の危険とかを恐ると同時に、他方に於いて私の弱い心を彼等の前に表白するの勇氣をもたなかつた」大石の「偽」の姿が招いた「真実」、それが国家＝天皇に対する「大逆罪」という罪を被せられ、死刑にされることだったのである。海外経験も豊かな医者、弁論家としての得意の絶頂にあった彼には、信じられないほどの過酷な現実であった。

死刑判決の翌日、半数は無期に減刑された。そのほかにも減刑があるかとの期待もむなしくその一週間後には絞首刑が執行された。大石は明治44年1月24日午後2時23分絶命した。11名が24日に、菅野のみ25日に死刑を執行している。

裕福で社会的にも尊敬された大石の「弱者、貧者の哀れなることを感じ」抱いた「センチメンタルな感情」、(大石陳弁書)は後に関東大震災(1923)で殺される大杉栄も否定しな



かった感情である。佐藤春夫の「わが回想する大杉栄」(1923)では以下のように語られている。

「武者小路だけはちよつと面白いよー機会があれば論じて見てもいいと思つてゐる」と言つた。志を得ないでゐた私は誰のことも感心したくはなかつた。それで私は大杉に「だつて武者小路の人道主義は要するにセンチメンタリズムぢやないか」と言つた。その時の大杉の答を私は面白いものと思つて忘れないでゐる。大杉は答えた。

「さうさ。センチメンタリストだよ。まさしく。だけど、すべての正義といひ人道といふものは皆センチメンタリズムだよ。その根拠は。そこに学理を立てても主張においても科学を据ゑても決して覆へらない種類のセンチメンタリズムなのだよ」<sup>25)</sup>

当時(「田園の憂鬱」出版前)を振り返った文章で佐藤は「僕の周囲ではみな武者小路の文章を笑つてゐる中で、僕はここにこそ、新文章があるのだと、眼をひらいた」と述べている。このセンチメンタルな感情が正義と人道の出発点となる。しかし生半可なセンチメンタリズムは国家イデオロギーに回収され、容易くナショナリズムに転化していく。

## 2. 佐藤作品と「大逆」事件

佐藤春夫の作品の中で「大逆」事件に関連したものは多い。そもそも代表作として挙げられる「田園の憂鬱」は「大逆」事件後の世情を反映したものであると言われている。詩では「愚者の死」「病」「街上夜曲」「煙草」(1911)などが挙げられる。散文では「或る女の幻想」(1917)「魔鳥」(1923)「飯田橋の神様」「二少年の話」「若者」(1934)「わんぱく時代」(1957)などである。また、自伝と

して「青春期の自画像」(1948)「白雲去来」(1955)「詩文半世紀」(1963)「私の履歴書」(1956)などがあり、表現は重なっているが、いずれも「大逆」事件や大石誠之助に言及している。

事件直後に書かれた「愚者の死」は前述のように佐藤の文学的出発点であったともいえる。しかし、その後、戦前に書かれたものはいずれも小品である。その小品を積み重ねるようにして、「わんぱく時代」は書かれた。

### 2-1 「大逆」事件を詠う — 「愚者の死」

「愚者の死」は明治44年3月の『スバル』に、「病」「街上夜曲」「煙草」は明治44年4月の「スバル」に掲載された。いずれも春夫の明治44年に発表された「清水正次郎を悼む長歌并短歌」<sup>26)</sup>を含めて、「傾向詩」と呼ばれ、のちの『殉情歌集』に代表される叙情的な詩と区別される。ここでは「愚者の死」を取り上げる。

「愚者の死」

千九百十一年一月二十三日

大石誠之助は殺されたり。

げに厳肅なる多数者の規約を  
裏切る者は殺さるべきかな。

死を賭して遊戯を思ひ

民俗の歴史を知らず、

日本人ならざる者

愚なる者は殺されたり。

「偽より出でし真実なり」と  
絞首台上の一語その愚を極む。

われの郷里は紀州新宮  
渠の郷里もわれの町

聞く、渠が郷里にして、わが郷里なる  
紀州新宮の町は恐懼せりと。うべさかしかる  
商人の町は嘆かん、

一町民は憤めよ。

教師らは国の歴史を更にまた説けよ。

『定本佐藤春夫全集』第2巻 P107～108

「反語に満ちた表現ゆえ、当局の追及を免れた」この詩が佐藤を少年詩人として世にしらしめることとなったのである。天皇暗殺という「死を賭して遊戯を思ひ」、「民俗の歴史を知らず、日本人ならざる者」であった大石を「われの郷里は紀州新宮 彼の郷里もわれの町」として近い者として悼み、「『偽より出でし真実なり』と絞首台上の一語その愚を極む」と、大石があまりにも過酷な刑を前に途方にくれている様子、彼自身の行い、そして郷里の人々に思いを馳せるような詩である。この詩については権力の暴虐に対する怒りを表したものと定説化されているが、一方で「この詩は反抗兒的だった佐藤の何ものかに対する憤怒を表わすと同時に大石との精神的決別を表現するという性格をあわせもっていると見ることができるのである」とし、同時期に書かれた「誠之助の死」という与謝野寛の詩のほうが「イロニーたり得ている」という評価もある<sup>27)</sup>。

ではこの詩をどのように理解したらよいのだろうか。「愚者の死」は1911年3月に発表されているが、同年5月の佐藤の小文「『日本人脱却論』の序論」が「愚者の死」の解釈の助けとなる。この「『日本人脱却論』の序論」は『新小説』の「小評論」欄（生田長江選）への応募作品である。この小文はニーチェの「ツアラトウストラはかく語りき」に寄せて書いたものである。

この独逸の時代批評の詩人は「危険と遊戯を愛する者」を真の男性とした。日本では殺されるべきものが自殺の形式をする武士道と云ふものが尊重される。思ふて茲にいたる時、日本人なるものは渠が謂ふ所の「未人」それ自身として眼を瞬いてわれらの眼前に表われる。日本人ならざる者は真の超人たり得るであらう。日本人は超人たらん前に先づ一度日本人を脱却しなければならぬ。

『定本佐藤春夫全集』第19巻 P5

「死を賭して遊戯を思ひ」「日本人ならざる者」はここでは「真の男性」であり、「超人」であると述べられ、「日本人が超人に達する里程は他の人人より更に遙である」としている。「真の男性」「超人」はここでは理想の人間を指す。「日本人なるもの」は「未人」であり、「日本人ならざるもの」こそ「超人」であるとしている。

『不適の冒険と、長期の不信と、残忍なる否定と、倦怠と、命あるものに切り込むことと一此等のものの会すること如何に希なるかな。されど斯かる種より一真実の芽は生ず』この一句を聞け。日本人の耳元に来て「ざま見ろ」と喚く声である。此等のものの会することと云ふに至つては我等の胸に鋭き白刃を刺すものである。（前出書）

「此等のものの会すること」とは「大逆」事件の犠牲者たちを指していることが読み取れる。そのことが「如何に希なる」ことであつたか。この詩の背後には、以上のような意味が隠されていたことがわかる。

### 3. 「わんぱく時代」

#### 3-1 作品の成立経緯

「わんぱく時代」は1957年10月20日から翌

年の3月17日まで朝日新聞夕刊に連載された。戦後佐藤は少年期の新宮時代の思い出を綴った文章を多く発表している。「青春期の自画像」(1948)、「白雲去来」(1955)「日本とところどころ」(1954)「私の履歴書」(1956)などである。戦前には新宮時代の思い出を語ったものは決して多くはない。上記の「青春もの」には必ず新宮中学校時代のさまざまな事件や「大逆」事件への言及がある。しかしながら、戦前に書かれた1930年代の「青春もの」には、「大逆」事件や大石との距離感を感じざるをえない。「田園」時代に入る前の少年期の出来事を十分に語るには戦後を待たなければならなかったのである。

### 3-2 「わんぱく時代」まで

—「或る女の幻想」「二少年の話」「若者」にみる「大逆」事件の回避

佐藤の散文の中で「大逆」事件に関連した作品は「ある女の幻想」(1917)、「二少年の話」(1934)、「若者」(1934)、「わんぱく時代」(1957)などがある。ここでは「わんぱく時代」に先立つ戦前の三作品について分析していく。

#### 3-2-1 「或る女の幻想」(1917)

「或る女の幻想」は大正6年(1917)12月1日発行の『中外』に掲載された。原稿のすっぱかしの穴埋めとして師生田長江の紹介で掲載されることとなったものである。佐藤の自伝「詩文半世紀」にはその製作と掲載の経緯が語られており、「明日の傑作より、今日の愚作が役に立つのですがね」という長江の勧めもあったという。

「田園」は構想も、表現の文体も考えているが書き出しさえできないので、筆ならしのため「或る女の幻想」を書き出し

てみた。これは大逆事件の直後、わが郷里新宮にあった事実を、沖野岩三郎から聞いておいたのを、映画のストーリー風にデフォルメしたもので、文字通りの愚作に相違なかった。

『詩文半世紀』昭和38年(1963)  
第7章 文壇登場

「或る女の幻想」は、新宮出身の「彼女の女」の不思議な「体験」を幻想的に描いた作品である。以下、物語を簡単に紹介しておく。時代設定は1910年頃と考えられる。

「彼女の女」は18歳の時、病氣療養のため箱根を訪れ、そこで少年紳士と出会う。少年紳士は女に愛を告白し再会を誓う。しかし、少年紳士は突然姿を消してしまう。女は彼を探し当て、病中にあったことを知り献身的に看病する。少年紳士は伯爵家の公子であった。退院を祝って園遊会が開かれることとなったが、公子の婚約者と目された女は伯爵の悪行と園遊会の浪費に反対する社会主義青年二人に誘拐されてしまう。そこで女は本当の婚約者は別のE令嬢に違いないと述べ、無罪であることが証明され解放される。しかし、E令嬢を落とし入れたかもしれないという悩みと「意識の空白」があったことへの恐れのため、「彼女の女」は苦悩し、知り合いのO牧師に相談する。彼女の女は社会主義二青年を大逆事件の首謀者とされたS・Oの甥たちであると思ひ込んでしまう。

彼女の女はこれらの不思議な事件に遭遇した後、東京の叔父の下から故郷の父母へ帰された。彼女の女の故郷は紀州新宮地方であった。この地方は、その当時の世界的事件である所謂大逆事件たる数人の社会主義者が一時に刑された。或いは死刑になり、或いは無期懲役になった。さうして社会主義

なる言葉は一種の地方的恐怖であつたのである。

「或る女の幻想」『定本佐藤春夫全集』  
第3巻 P54～55

この作品の大逆事件との関連は、「彼の女」が新宮出身であること、社会主義二青年のイメージが西村伊作とその弟眞子に重なること、O牧師のモデルが沖野岩三郎であることなどが上げられる。「彼の女」の夢ともうつつともつかない恋愛体験の中に「社会主義者」が紛れ込む、不思議な世界である。しかし、他の戦前の作品が、大逆事件に触れている程度であることを考えれば、この作品は当時の「世情」や佐藤自身の感情を投影したものだといえる。さらに「或る女の幻想」について佐藤は以下のように述べている。

それにしても「或る女の幻想」はあれだけの枚数であれだけの事日であつたとしても、あんな小細工を弄した奇道を行つたのはまさしく間違いであつた。あれはやはり沖野牧師から聞いたとほりに、大逆事件で大きなショックを受けた地方の文学少女的田舎娘の実話としてルポルタージュ風の風俗小説にした方がわかりがよかつたであらう。

「うぬぼれかがみ」（1961）  
『定本佐藤春雄全集』第24巻 P214

「うぬぼれかがみ」は、中村光夫の「佐藤春夫論」（1961）への反論として書かれた後年の佐藤の自己弁護の傾向が強く現れた散文である。中村は「或る女の幻想」を力作としては物足りないと言及し佐藤のこれまでの仕事を「或る女の幻想」と同じく全ての分野で入り口にしか立たなかつたと批判した<sup>28)</sup>が、佐藤はこの作品について最初から力作ではな

かつたと反論している。たしかにこの作品の「或る女」という狂人の苦悩の原因である社会主義二青年の登場のさせ方にも書き込みの不足を感じる。狂人から見た世界を描いているのか、狂人を描いているのか、どこまでが事実なのか、不明である。しかし、この作品全体の雰囲気は推理仕立ての後年の作風を予感させるものである。この作品の書き出し部分には以下のような但し書きがある。

「左に録するは、某女が、彼の女の不思議なる苦悶と恐怖とに就いて、牧師O師に訴へたる所のものを、変態心理研究学生N氏が、O氏よりの伝聞に憑れる記録を更に活動写真作者F氏が、その作品の資料として（？）伝写せしものに係る」

つまり、この作品は「聞き書きのまた聞き」という設定となっている。作中の「O氏」（沖野）や「社会主義二青年」（西村兄弟）との交友は実際にはかなり近いものであったと推測できるが、ここでは距離をおいた存在として記述しているのである。大正5年の『特別要監視人状勢一斑』には沖野岩三郎、西村伊作、（大石）眞子兄弟は警察による要視察人のリストに名前が挙げられていた<sup>29)</sup>。

### 3-2-2 「二少年の話」「若者」

この二作品は、後年書かれる「わんぱく時代」昭和32年（1957）の挿話に類似した設定となっている。「二少年の話」は昭和9年（1934）2月1日発行の『中央公論』に掲載された。「若者」は同年10月発行の『文芸春秋』に掲載された。両作品ともものに『我が成長』という単行本に収録されている。

「二少年の話」の登場人物は加藤と南という少年である。時代設定は「日露戦争前からその後2・3年」となっているから1904年～

6年ごろと考えられる。佐藤は1892年に生まれているから年齢的に附合する。加藤は佐藤春夫の幼年時代をモデルとしていると考えられる「町でも中流以上の子弟」である。南は村の子で南の兄が脚気となりその薬を医者である加藤の家にもらいに通うところから交際が始まる。南は自分の家に加藤を誘い親しくなる。やがて加藤は中学校へ進学。沖という少年と親しくなる。進学しなかった南とは自然疎遠となるが、加藤が中学2年になったころ、南がドクトルさん（大石誠之助）の薬局生になったという噂を聞く。南は大石や西村伊作が作った「新聞縦覧所」の手伝いもしていた。また、大石のところに身を寄せていた社会主義者新村忠雄とも付き合い始める。雄弁で新奇なものを好む南に翻弄されていた加藤はだんだん南を苦々しく思うようになる、という物語である。

「若者」は明治42年（1909）の出来事を語った話である。内容から言って「二少年の話」の続編と考えてよいであろう。以下これも粗筋をみておこう。佐藤の新宮中学での事件が下敷きとなっている話である。

作中の「若者」は、新宮の町で行なわれた文化講演会で飛び込みで「現代青年としての告白」という短い講演をおこなった。その講演の中に「ニヒリスト」という言葉を使い、ニヒリスト＝社会主義者という学校側の一方的な決め付けによって無期停学処分となる。実はこれは「若者」の父の町での反対者が仕組んだものであった。この事件は地方新聞でも取り上げられ、南は「竹馬の友」として彼を援護するがこれも、「若者」に社会主義臭をつけさせようという反対者の仕組んだことであった。のちにこの事件は協同学資金の使途をめぐる学校騒動となり拡大する。また、大石を中心とする社会主義者のグループは彼と中学生らの行動を支持する動きをみせる。

事件は学校への放火騒動にまでいたった。

これ等の話の中に出て来た大石といふのはその後数年の後に或る事件のために死刑になつたがその後に南が人に語つたといふところを伝へ聞いたのに、中学校炎上の当夜当刻、南は大石の家に居合わせた。その時の大石の挙動は不信なものであつたといふ。早鐘を聞いて表へ飛び出しざま声を限りに

『火事ちやぞ、中学校が火事ちやぞ』と狂気のように呼び続けてゐた。隣人にアライバイを取つておかうといふつもりであつたらう。それは分かるが、表へ出るか出ないに方向を見定める間もなく中学校の火事と知つてゐるのは人間業とは思へないではないか。

と南が話してゐたといふ。尤も南はいつも虚実相半の話をする男だつたから彼の見聞と称するものもあまり信用は出来ない。

「若者」 『定本 佐藤春夫全集』

第9巻P196

「二少年の話」「若者」の二作を通読すると、佐藤の中学時代の騒動には町政における佐藤の父豊太郎の反対者、そして大石らのグループが佐藤と関わりのないところで暗躍していたという筋書きが浮かび上がる。「若者」に登場する南は「二少年の話」の南である。「わんぱく時代」では大石の学校火災との関連を匂わせたのは沖野岩三郎であったと実名を挙げているが、佐藤の真意は不明である。これらの作品で、主人公の幼馴染として登場する「南」は、「わんぱく時代」の「崎山栄」となる。

### 3-2-3 自伝と「大逆」

#### — 「わんぱく時代」

「わんぱく時代」（1957）は「自叙伝的性

格をもつた虚構談である」と佐藤春夫は特装版のあとがきで述べている。「私は少々事実を曲げてでも真実を書きたかったのである。虚構は私にとって真実を書くための隠れ蓑である」。真実ではあっても事実ではない－「わんぱく時代」は虚実相半した物語である。

主人公は須藤少年（佐藤）と幼馴染の崎山栄の二人である。須藤少年が満9歳の年、明治34年（1901）に転校してきたのが崎山である。日清戦争後の戦争景気に沸く新宮を舞台に、その崎山が大逆事件に連座して刑を受けるまでのおよそ、10年間の二人の交友を描く物語である。「二少年の話」は1904年ごろ、「若者」はそれに続く1909年までの話であった。「わんぱく時代」はそれ以前の小学校4年生からの話を中心に進められる。須藤を中心とした新宮の第一小学校グループと熊野地の第二小学校グループの子供同士の戦争ごっこが延々と繰り広げられる。様々な階層の子供たちと崎山の姉のお昌ちゃんなどが登場し、子供時代の平和な日々が描かれる。この「戦争」は須藤少年が中学校に行っても続けられていた。野山を陣地とした子供戦争であったが、結局野球と相撲で決着をつけ、兩人ともに子供時代に別れを告げ、激動の時代の流れに巻き込まれていく。須藤の周辺では「若者」に書かれたのとほぼ同じように中学校における停学処分、同盟休校、火災事件が立て続けに起こり、結局彼は東京に出ることとなる。一方崎山栄は家庭の事情で中学校に進学できず、「新聞縦覧所」などに居ついたりしたが、赤木（高木顕明がモデル）和尚や大石ドクトルの世話で筏乗りの成石に弟子入りする。

ほのかな街灯の下にずらりと並んだ二十四名の姓名のうち崎山栄の名前を見出した時はそれが死刑囚ではなく仁慈に浴した無期懲役囚の最後のものであつても、僕は

ひとごとながら悪夢を見ているやうな気がした。主魁と目された幸徳や大石などの名は自然耳にしてるてもここに崎山の名を見出さうとは全く思ひがけなかつた。

「わんぱく時代」『定本佐藤春夫全集』  
第26巻 P274

こうして街頭で友が「大逆」事件に連座したことを知った須藤は連れ立っていた友人らと別れ、帰宅、その夜大石の死を弔う詩を書く。崎山は無期に減刑されたが東北の獄中で数年後病死する。物語は「大逆」事件への須藤の思いを語って終わる。新聞小説ゆえか、物語はほころびを見せ、以下は読者への応答ともいうべき内容である<sup>30)</sup>。

だから、大逆事件の記録中に崎山栄などといふ青年が見つからないのを気にするやうな読者があつたならば、僕はその読者に向つて言ひたい。裁判官たちの大逆事件には崎山は加はつていなかつた。しかし、僕の知つてゐる大逆事件には崎山がゐた。これを信じないやうな素朴な読者は、いつそ、大逆事件などいふ事実は僕のいふ真実以外は、全然なかつたものと考へたほうがよからう。

そもそもわが崎山栄は、僕があばら骨一本を抜いて僕の胸中に生み、さうして真実の大逆事件といふ社会機構の毒蛇の口に泣きながら人身御供に捧げるために僕が愛し育ててきた象徴的人物なのである。

「わんぱく時代」（前出書） P275

「二少年の話」「若者」における南、そして「わんぱく時代」の崎山には共に特定のモデルを挙げることはできない。「わんぱく時代」において、南にはときに沖野岩三郎が言つたとされる中学校の不審火が大石一派の仕業で

あるかのようなことを言わせ、崎山はその手先であったかもしれないという疑いを述べている。また、「崎山」の名前は崎久保誓一を連想させる。崎久保は明治18年(1885)、牟婁郡木村に生まれている。新聞記者として牟婁新報などに勤務したが、社会主義に関心を持ち、大石の周辺で活動した。大逆事件に連座し、千葉監獄に送られ無期懲役の刑に服したが、新宮グループの中で唯一戦後まで生き延びた。無期刑を受け、秋田監獄で自殺したのが高木顕明であり、千葉監獄で病死したのが峰尾節堂であった。佐藤と年齢的に近いのが崎久保と峰尾であるが、「崎山」は、このような幾人かの犠牲者からつむぎ出された「象徴的人物」と考えるのが妥当であろう。

「崎山」は佐藤の「あばら骨一本を抜いて僕の胸中に生み」育てた人物であり、もう一人の佐藤春夫であったのではないだろうか。また先の崎久保誓一が1955年に死亡し、前出の沖野岩三郎も1956年に死亡していることを考えると「わんぱく時代」は事件関係者が全ていなくなってから書かれたことがわかる。語ることができたのは佐藤一人であり、だれも反論ができない状況の下で、「大逆」事件を語る特権をひとり享受したともいえる。

では、佐藤は「大逆」事件の本質をどのようにみていたのだろうか。

然らば真実の大逆事件とは何か。当時天皇は神聖にして犯すべからずと法で定められてゐた。その天皇をこともあらうに階級などあるまじき不敬事を種に国民を煙にまいて、天皇を支配階級の具に供し、あまつさへ天皇陛下の赤子十二人の虐殺を国家の権威を借りて断行した事件で、かういふ過激な事件を醸造した時の政府とその手先の裁判官どもこそ真実の大逆罪と僕は信じている。

「わんぱく時代」 (前出書) P279

佐藤の「大逆」事件の認識は、かの24名は冤罪である、「大逆」事件は当時の権力者が天皇を利用して作り出した「創作」にすぎず、「大逆」罪に問われるべきは、「天皇陛下の赤子十二人」を虐殺した時の政府と司法官である、というものである。ここには「大逆」事件を批判する姿勢は見えても天皇制への批判を見出すことはできない。天皇は国体そのものであり、佐藤には天皇に対するのと同時に国家に対する批判もない。ここにあるのは、目の前にあった犠牲者を傷み、怒る「センチメンタル」な感情である。「大逆」事件の犠牲者たちを「天皇の赤子」と語る彼には、「大逆」の確信犯たちの大義はまったく見えていない。

郷党が危険な反抗児と見、やがてその少反抗児が「愚者の死」や「清水正次郎を悼む」程度がわが国の生活人といふものである。さればこそ石川啄木が尊重される所以なのである。これ以上の生活人になると生かして置かないのが、この国のわれわれの時代のならひだということぐらゐは、中村君、君もご承知のはずだと思ふが、いかがであらうか。ともかくも僕は命がけの生活人ではなかつたことは確実である。僕はこのとほり、生きてゐるのだから。

「うぬぼれかがみ」(1961)『定本佐藤春夫全集 第26巻』P198

佐藤春夫の限界は、「大逆」事件に関する作品の中にはっきりと浮かび上がっている。「石川啄木」とはなりえなかつた「生活人」としての彼は、自分の分身でもある「崎山栄」ではなく、文学者として生きていくことになる。「わんぱく時代」は全くの安全圏にいて

書かれた作品であるにも関わらず、この作品において、来し方を振返る彼には「崎山」として生きることなどありえなかったことを示したにすぎない。個人的な「センチメンタリズム」は国家イデオロギーを超えることはない。国家や天皇を当然視する彼のこの「生活人」としての限界が、植民地台湾に関しては同情的な作品を残しながらも、「大東亜戦争」に関しては全面協力してしまうという、これ以降の彼の社会的な姿勢に反映していくのである。

\* 文中の漢字は旧字の場合、原則常用漢字に変えた。仮名遣いは原文のまま採用した。

\* 「愚者の死」「わんぱく時代」「二少年の話」「若者」「或る女の幻想」はいずれも『定本佐藤春夫全集』（臨川書店）を底本とした。

（注）

- 1) 菅野（すがの）すが、が本名であったが、自ら菅野（かんの）須賀子と名乗った。
- 2) 北村晋吾（2001）『大逆事件の犠牲者 新宮の医師 大石誠之助物語』（発行所北村小児科医院）P37
- 3) 柏木隆法（1979）『大逆事件と内山愚童』JCA出版 P165～166
- 4) 明治43年5月17日～25日にかけて、長野県明科の官営製材所において宮下が新田に命じ、ブリキ缶24個を製作させ、新村が隠匿した爆弾が白木の箱に入って発見された事件。湯河原で執筆中の幸徳は「扇動者」として同年6月1日に逮捕された。
- 5) この新宮グループと共に、森近運平らの関西グループ、松尾卯一らの熊本グループも検挙され、逮捕者は26名に上った。
- 6) 与謝野寛は明治44年11月にフランスへ出発した。そのとき晶子は「海越えて君さびしくも遊ぶらん追われるごとく逃るごとく」と詠んだ。
- 7) 桂秀美（2001）『「帝国」の文学－戦争と「大逆」の間』以文社P225
- 8) 内藤千珠子（2005）『帝国と暗殺 ジェンダーからみる近代日本のメディア編成』新曜社P316
- 9) 明治33年（1900）5月10日～昭和17年（1942）3月まで福島四郎らによって発行された週刊誌。東京・婦女新聞社刊。
- 10) 内藤千珠子 前掲書 第二部参照
- 11) 本節は、絲屋壽雄昭和46年（1971）『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』、北村晋吾『大逆事件の犠牲者 新宮の医師 大石誠之助物語』などを参照した。
- 12) 柏木隆法『大逆事件と内山愚童』 P165
- 13) 小山松吉の『日本社会主義運動史』によると、元元老が小山松吉を呼び出し、取調べなどは大急ぎでやって関係者は一人残らず死刑にしてしまえと圧力をかけた旨が記載されている。絲屋壽雄『大石誠之助 大逆事件の犠牲者』P128
- 14) 柏木隆法『大逆事件と内山愚童』 P170
- 15) 沖野岩三郎（1876～1956）、和歌山県生まれ。1907年から1917年まで新宮教会牧師を務める。1914年から文学活動を開始。「宿命」（1917）、「煉瓦の雨」などを残す。その多くは「大逆」事件関係者をモデルとした作品であった。沖野は大石の遺族の東京移住を助けている。
- 16) 野口存爾（1989）『沖野岩三郎』 鞆青社 P43
- 17) 「自転車」は『新公論』大正7年6月号に発表された。
- 18) 西村伊作（1884～1963）は大石の甥にあたる。1895年の大石の帰国以降大石や大石の姉井手睦世によって養育される。後に文化学院を設立する。
- 19) 「刺身にマヨネーズをつけると結構食べられます」「カレーライスにウニと海苔をかけて食べると至極結構」など、和洋折衷料理に挑戦している。後に平民社で「菜食主義」が話題に上った際も意見を述べている。『大石誠之助全集』2（1982）弘隆社 より。この『家庭雑誌』への寄稿により、堺利彦と知己を得た。
- 20) 『大石誠之助全集2』 P338 明治40年前後教員の初任給10円強ぐらいたったといわれていることから考えるとかなりの高額といえる。
- 21) 1907年には、宇都宮卓爾、百瀬晋、1908年には幸徳秋水、1909年には新村忠雄らが、数週間から数ヶ月に渡って大石宅に身を寄せている。
- 22) 『大石誠之助全集2』 解説（2）P325～
- 23) 『大石誠之助全集2』の「年譜」P333～347、『佐藤春夫全集第12巻』（講談社）参考にした。



- 24) 「わんぱく時代」『佐藤春夫全集15巻』(1998)  
臨川書店P269～270, 沖野岩三郎の話としてその疑惑が語られている。野口存爾はその著書『沖野岩三郎』の中でそのことに関して疑義を述べている。
- 25) 佐藤春夫「吾が回想する大杉栄」『中央公論』大正12年(1923)11月号
- 26) 明治天皇の行幸に際して門司駅で乗車が一時遅れた責任を感じ、九州鉄道社員の清水正次郎が鉄道自殺を遂げたことをうたったもの。『スバル』明治44年12月号掲載。
- 27) 野口存爾『沖野岩三郎』 P155
- 28) 中村光夫 昭和37年(1962)『佐藤春夫論』文藝春秋社 P9
- 29) 野口存爾『沖野岩三郎』 P43～44  
佐藤作品において、物語の途中で読者の読み違えを咎めるような文章の挿入は他の新聞小説でも見られる。『警笛』大正15年(1926)など。
- 30) 中村光夫『佐藤春夫論』 P120～121